

第一章 光る源氏の物語 逝く春と離別の物語

[第一段 源氏、須磨退去を決意]

世の中、いと*わづらはしく(御所での形勢が実に悪く)、はしたなきことのみまされば(右大臣家勢の嫌がらせがますます酷くなって来たので)、「せめて知らず顔にあり経ても(せめてもと相手にしないで遣り過ごしていても)、これよりまさることもや(もはや好転する見込みは無い)」と思しなりぬ(と大将は思い至りなさいました)。 *「わづらはし」は<負担が多すぎて困る>ことだろうが、後述される話から具体的には<謀反の嫌疑>を掛けられていたらしい。

「かの*須磨は(古くから美しい砂浜と歌に詠まれた須磨は)、昔こそ人の住みかなどもありけれ(昔こそ名士の別荘などもあったが)、今は、いと里離れ心すごくて(人里遠く寂しげで)、海人の家だにまれに」など聞きたまへど、 *注に<「須磨」は歌枕の地。「こそ」「ありけれ」の係結びは、逆接用法。「わくらばに{何かの折に}問ふ人あらば{私の消息を問う人が居たら}須磨の浦に{須磨の海辺で}藻塩垂れつつ{塩造りの海藻から海水が垂れる様に涙を零しながら}わぶと答へよ{寂しく暮らしていると答えてくれ}(古今集雑下、九六二、在原行平)。「人」は身分のある人の意、「住みか」はその別荘をさす。以下「まれに」まで、人の言の間の引用。({}は我訳。)>とある。歌枕なら「須磨」だから<住む>とか<済む>に掛けて用いられたのだろう。引歌の方は失脚して須磨に流された役人の嘆き節らしく、「須磨の浦」だけに「藻塩垂れつつ」と洒落てみた、のだろう。「藻塩(もしほ)」については<海藻からとった塩。海藻を簀子(すのこ)の上に積み、いく度も潮水を注ぎかけて塩分を多く含ませ、これを焼いて水に溶かし、その上澄みを煮つめて製する。(大辞泉)>とある。この製塩法は昔ながら復活だか忘れたが、今でも確か瀬戸内の何処かで行われていて、割と最近テレビで見た。

「人しげく(人が多く)、ひたたけたらむ住まひは(騒々しい暮らしは)、いと本意なかるべし(とても隠棲とはいえないだろう)。さりとして、都を遠ざからむも(都を遠ざかってしまうのも)、故郷(ふるさと、家に残す妻が)おぼつかなかるべきを(心配になるし)」、*人悪くぞ思し乱るる(などと人聞きの悪いような身勝手な事情も勘案なさって、須磨行きを決意なさいます)。 *一読した限りでは「思し乱るる」は<思い悩みなさる>だから、此処の記述が<須磨行きを決定した>とは読めなかった。しかし先を読むと、既に須磨行きの決定を前提とした記述になっているので、此処の文で<悩んだ挙句に決定した>と読まざるを得ない。この分かり難い書き方に<作者が「須磨」を選んだ事情>が投影されているように思えたので、少し考えてみた。なるほど<源氏が「須磨」を選んだ事情>は此処に書かれているように、名所とは言うものの今は寂れていて謹慎地に相応しい事と、謹慎地とはいえ都に遠くない近畿の隅っ処だった、からとされている。しかし作者は今回の<源氏都落ち>を物語全体の構成上で主たる転換点に据えていただろうし、それも書き進める内に思い付いた展開などではなく、当初の基本構想での設定に違いない。というのも源氏が何時かは謹慎する事になるであろうとは既に若紫巻に於いて、父帝の若妻であり自分からは継母となる藤壺と密通した源氏が、藤壺の懐妊を知る前に不吉な夢を見て、其の夢解きを夢占い師に夢合わせさせた時に「その中に違ひ目ありて、慎ませたまふべきことなむはべる(其の内に不遇な目に遭って謹慎なされなければ成らない事が御座います)」と告げられた記述があって、今の事態が予告されていたからである。要するに、継母の膾内に中出しした覚えがある源氏が、その結果責任の重圧を想起して思案に暮れた挙句に不安に駆られて見た夢、にこの謹慎は符合する。謹慎に到る直接の、また客観的な契機は六姫との密通を右大臣に目撃された事に依るもので、それ自体の意味も決して軽くは無いが、物語の主題としては「因果を含む存在の解決」が提示されている気がする。そこで、作者本

人および其れを察した読者を納得させる為に「思し乱る」と結んで、謹慎地の設定についてはくその他の諸般の事情を勘案した上で>他所ならぬ「須磨」に決定したのです、と断っているように思える。いくつかの整合性、詰まりは都合の良さで決めました、と言っている訳で、原理原則から導いたと言うものでも有りません、という言い方は、この作者の基本的な姿勢を表明しているようでもある。「謹慎」を支える精霊は何処にでも居て、「聖地」は一定の現象の見方や一つの考え方に過ぎないけれども、「須磨」を聖地に決めたからには其の前提で話を進めます、と言われたようで、つい、ア、ハイ、と答えてしまいそうだ。物語を綴るには基本構想も基本理念も必要だろうし、頭の中に無い事は書きようも無いのだろうが、人気作家の性かパトロンの意向か、いずれにしても作者が最大限読者の期待に応えようとした素直さは受け止めたい。さて其の<都合の良さ>の中身だが、是はとても素人の私の手には負えない。Web 検索しても纏まった答えが見つからず、その検索中で気になった参考文献を入手して知恵を拝借する事にした。「源氏物語 地名と方法」(桜楓社、1990年)という本である。この本は概論風だが複数著者による論文集めいた内容で、其処から論本文を引用すると検証の為に脚注や補足が煩雑になるので、その書を参考にした大雑把な話にとどめる事にする。以下は、当書を参考にして「須磨」決定について私が気になった幾つかの要点だが、次巻が「明石」と命名されている事からも、「須磨」および「明石」という地区設定の決定要素、という事で把えたい。少々先走りに成らざるを得ないが、「須磨」で「謹慎」の実をくすま>せて、「明石」で「再起」の夜くあかし>を図る、という流れは概略で察しを付けた上でのノートになる。さて、その設定要素の①は、物語本文にも源氏の思いとして書かれているが、「須磨」は畿内の摂津国の端で都の<スミ>であり、境川を挟んだ向こう岸は山陽道の入口が明けた播磨国の「明石」である事から、話の展開上で物語を運ぶのに当地は都合がいい。②は「須磨」および「明石」が歌枕で、在原行平をはじめ引用できる句が多く、物語を彩るのに当地は都合がいい。③は「須磨」が製塩地で<清めの塩=消毒>の知恵から、その地へ赴く事を以って表向きには謀反の汚名を濯ぐ為であり、内向きには不倫の宿縁を禊ぐ為であるという、物語の説得力を増すのに当地は都合がいい。④は、また「塩屋」についてはく製塩=塩を焼く=潮時を窺う=いい機会を探る>ということから、物語に含みを持たせるのに当地は都合がいい。そして⑤だが、是は少し難題なので話を纏める前に事情を整理する。この物語の主軸であろう<帝位を襲うべき皇子の出生が義理の上とはいえ母子姦淫に拠る>という絶対禁忌を解決するために、作者は皇室所縁の住吉神の御祓いを想定した、らしい。住吉詣出の記述は未出で後述されるらしいので余計に分かり難いが、専門家の指摘なので一先ずは承って置く。ただし解決といっても、母子姦は公表したら絶対に世間は許さない不祥事である。この事自体の始末の悪さ、不届きさ加減は社会秩序の維持からして決して容認できないので、解決方法は飽く迄も秘密裏に処理する事が前提なのは変わらない。救うべきは、其れでも存在している魂である。得たいのは、天の赦しである。ところで③にある宿縁の禊は個人的な御清めである。是は言ってみれば本人が赦されたと思えば、とはいえ思うと言っても情を持ちつつ理を適えるのは普通はほぼ不可能ではあろうが、其れで一応は済む話ではある。この解決方法は内心での思いだから秘密裏に行う事は容易というより、何処までも他人の知り得る所でもなく、知った事でも無い。また仮に其れが出来たとしても、其れは個人的な解決に過ぎないので、この長話の主題とはいえない。提示すべき解決方法は、内実は秘密裏ではあっても形の上では公明な儀式を行って、事実上で朝廷の承認を受けることが具体的な内容になるのだろう。それこそは実に御禊の神事だが、それだけに其の御祭に正大な裏付けを持たせる事が肝要なのだろう。この巻で作者が其の公明正大さを何処まで、読者に説得出来るのかが腕の見せ所なのかもしれない。ともあれ後述される筈の「住吉神の御祓い」は公の、と言っても万人の納得など得られないので、天が社会的存在を赦すという意味での、御清めであり、春宮が帝位に就くためには不可欠な神事である。そこで住吉神御前の<澄みの江>たる難波津の端にあたる「須磨浦」を謹慎地に設定する要素の⑤としては、物語の主題を訴えるのに都合がいい、という次第である。尤も是は都合が良いというより、当時の教養人にとっては必然とも思える決定だったかもしれないが、それでも他所を設定する作為の余地はあっただろうし、作者は読者の期待に応えつつも、ベタな感じは避けたかったように見える。書中には他にも種々の指摘が在るが、私としては当座は是位を覚えておきたい。

よろづのこと、来し方行く末、思ひ続けたまふに、悲しきこといとさまざまなり。憂きものと(何もかも厭になって)思ひ捨てつる世も(望みを捨てた宮仕えも)、今はと住み離れなむことを思すには(いよいよ都を離れようかと御思いに成ると)、いと捨てがたきこと多かるなかにも(やはり思い切れない事が多くでてくる中でも)、

姫君の(西の対の君の夫人が)、明け暮れにそへては(日毎別れが近付くにつれて)、思ひ嘆きたまへるさまの(御悲しみの様子が)、心苦しうあはれなるを(胸に迫って可哀相だったので)、「行きめぐりても(何処へ行っても)、また逢ひ見むことを(いつかまた会う事を)かならず(必ず誓う)」と、思さむにてだに(肝に銘じても)、なほ一、二日のほど(わずか一、二日ばかりを)、よそよそに明かし暮らす折々に(別々に過ごした時でさえ)、おぼつかなきものにおぼえ(源氏は夫人が心配になり)、女君も心細うのみ思ひたまへるを(夫人も心細くなるばかりに御思いで)、

「幾年そのほどと(何年の期限と)*限りある道にもあらず(決まった旅路でもなく)、*逢ふを限りに隔たりゆかむも(いつかまた会えるその日まで離れて暮らすと言っても)、定めなき世に(この無常の世の中で)、やがて別るべき*門出にもや(是が最後の別れに成ってしまうかも知れない)」と、いみじうおぼえたまへば(不吉に覚えなさって)、 *「限りある道」については<『獄令』には流罪の人は六年または三年後復任を許されるとある。源氏は自主的に退去したので、何年と限ることができない。>と注にある。 *「逢ふを限り」の言い回しについては<『河海抄』は「わが恋は行方も知らず果てもなし逢ふを限りと思ふばかりぞ」(古今集恋二、六一一、凡河内躬恒)を指摘する。その第四句の文句による表現。>と注にある。こういう歌は論理ではなく<思い>を感じ取れるか如何かなのだろうが、「後先も考えず命懸けで逢いたい」という言い方には簡単には逢えない事情が説明されていて、其の上でとにかく逢いたいという逸る気持ちも伝わる気がする。だから使いたくなる言い回し、なんだろうな。で、その「逢ふを限り」の此处での用法を言い換えれば<逢える其の日まで>だろうか。 *「門出」については注に<『紫明抄』は「かりそめの行きかひ路とぞ思ひこし今は限りの門出なりけり」(古今集哀傷、八六二、在原滋春)を指摘する。>とある。歌意は<ちょっとした旅の心算が死出の旅路となってしまった>といったところか。Webサイト「ミロール倶楽部」の古今集解説ページに、この歌の詞書に<甲斐路の途中で病に掛かった主人公が今際に人に託して母に贈った歌>とあり、「行き交い路」と「甲斐路」との言葉遊びの歌で、実際にはこんな惚けた辞世の句は有り得無い、と紹介されている。分かりやすい解説で大助かりだが、此处での焦点は「今は限り」の伏句が、「限りある道」および「逢ふを限り」の引用句と、「限り」連ながり<最期の門出>を当時の教養人にとって暗示する言い回しになっている事、なのだろうと思う。

「忍びてもろともにもや(妻をそっと一緒に連れて行こうか)」と、思し寄る折あれど(思ったりもするものの)、さる心細からむ海づらの(そうした寂しげな海面の)、波風よりほかに立ちまじる人もなからむに、かくらうたき御さまにて(この様な可憐な御姿で居る若妻を)、引き具したまへらむも(引き連れなさるのも)、いとつきなく(実に不釣合いで)、わが心にも(考えてみれば)、「なかなか、もの思ひのつまなるべきを(却って心配の種になりかねない)」など思し返すを(などと思し直しなさるのを)、女君は、「いみじからむ道にも(どんなに辛い旅路でも)、後れきこえだにあらば(後に残され申しさえしなければ)」と、おもむけて(言い張って)、恨めしげに思いたり(恨めしげに御思いでした)。

かの花散里にも、おはし通ふことこそまれなれ(お出掛けなさる事こそは稀でも)、心細くあはれなる御ありさまを(他に頼る当ても無い心細く御可哀相な身の上を)、この御蔭に隠れてものし

たまへば(大将のお世話でひっそりと暮らしていらしたので)、思し嘆きたるさまも(大将が辞職なさって隠遁なさるのをお嘆きになるのも)、いとことわりなり(至極当然でした)。なほざりにても(また其の他に成り行きのように)、ほのかに見たてまつり通ひたまひし所々(少し気に入っただけで抱き合う為に御通いに為った数々の所には)、人知れぬ心をくだきたまふ人ぞ多かりける(源氏の都落ちを人知れず寂しがる女が多く居たのです)。

入道の宮よりも(入信なされた中宮からも)、「ものの聞こえや(世間の人)、またいかがとりなさむ(また如何に噂するものだろうか)」と、わが御ためつつましかれど(自重なさりながらも)、忍びつつ御とぶらひ常にあり(遠慮がちに傷心の源氏を見舞う便りは始終ありました)。「昔、かやうに相思し(あひおぼし、思い合つて)、あはれをも見せたまはましかば(御優しきをも御見せ頂けていたなら、どんなに嬉しかった事だろう)」と、うち思ひ出でたまふにも(つい此れまでの事を思い出しなされても)、「さも(このように)、さまさまに(いろいろな事柄を引き起こすほど)、心をのみ(私の心の全てを)尽くすべかりける(埋め尽くしてきたような)人の御契りかな(この方との因縁なのだ)」と、つらく思ひきこえたまふ(辛く御思いのようでした)。

[第二段 左大臣邸に離京の挨拶]

*三月二十日(やよいはつか)あまりのほどになむ(過ぎの頃には)、都を離れたまひける(源氏は都を去って御出でに為りました)。*注に<「三月二十日余り」という設定は、安和二年(九六九)三月二十六日、左大臣源高明が大宰権帥に左遷された事件を準拠とするとされる。「離れたまひける」と、その後から語ったという語り口だが、以下に、離京までの経緯や経過を詳細に語る。>とある。源氏はこの年で26歳。4年前の8月に前の正妻を亡くし、3年前の11月に父院を喪っている。朝廷も源氏も其の翌年一年間は故院の喪に服したが、忌明け直後の一昨年の暮れ12月に中宮が出家して、去年からは春宮勢力である中宮や源氏に対する右大臣家の嫌がらせが露骨になってきていた。源氏の腹違いの兄である今上帝自身は故院の遺言に従って、末の弟宮にあたる春宮を次帝に考えているが、摂関家の源氏排斥は厳しく、どうやら大后の差し金で源氏に謀反の嫌疑が掛けられたらしく其の災いが春宮に及ぶのを恐れて、源氏はいよいよ本年の自主的謹慎を決意した、ということのようだ。出家してしまつては、春宮が即位した時に補佐出来ないので離職という形を取つた、ということなのだろうか。最初から復権は念頭に在る訳だ。故院の源氏を重用せよという遺言を今上帝が尊重しようとしている手前、右大臣家も無闇に源氏を葬ることは憚られた、のかもしれないが、災いの芽を残したままで右大臣家筋が納得するののかとも思いつつ、読み進む。

*人にいつとしても知らせたまはず(何方にも当日の日付はお知らせなさらず)、ただいと近う仕うまつり馴れたる限り(わずかに側仕えのごく親しい者の内から)、七、八人ばかり*御供にて、いとかすかに出で立ちたまふ(本当にひっそりと御出発なさいます)。*注に<『完訳』は「源氏の離京計画が右大臣方に漏れると、すぐにも流罪が決定しかねないので、秘密裡に事を運ぶ」と注す。>とある。右大臣方が源氏の意図を如何見ていたのかは気になるが、出発日を知らせない事を以つて秘密裏に事を運んだ事になるのかは良く分からない。是だけでは意味不明の「注」だ。参議大将という重役が進退を伺うべき上は帝であつて、此処の表記は帝に対する尊敬語では無い。むしろ此処で言う「人」とは「知らせ給はず」なのだから、公的な関係者というよりは私的な関係者のように感じられる。具体的にも続く文に「然るべき所々」とあるので、それらの馴染みの女たちが「人」なのだろう。*「御供」については<『完訳』は「通常なら、参議大将は、隨身六人で、供人は二、三十人に及ぶ」という。>と注にある。

さるべき所々に(そのような女たちには)、御文ばかりうち忍びたまひしにも(暫く旅に出るといいう手紙だけを密かに差し上げ為されたが)、あはれと忍ばるばかり尽くいたまへるは(大将は別れを忍び難く御思いに為る言葉を尽くしなさて)、見どころもありぬべかりしかど(さぞ見所の在る文面だったでしょうに)、*その折の(殿の出発前の準備や片付けに)、心地の紛れに(女房たちは慌しくして)、はかばかしうも聞き置かずなりにけり(詳しい所は筆者も聞き損じて良く分からないので御座います)。*此処の語り口については<語り手の文章。『弄花抄』は「例の紫式部詞也」と指摘。また『評釈』は「この語り手は、光る源氏須磨下向を、その目で見ずとも、その耳に聞いた生き残りなのである。老人の間わず語り、思い出話、それを筆記編集したのが、この物語である」という。『集成』は「主人公の身の事件を実際に見聞きした女房の話を筆録したものという建て前による草子地」という。>と注にある。

二、三日かねて(二、三日前に)、夜に隠れて(夜の闇に隠れて)、大殿に渡りたまへり(岳父の前左大臣の許に源氏はお出掛けになりました)。*網代車(あじろぐるま、軽装車)のうちやつれたるにて(使い古したもので)、*女車のやうにて隠ろへ入りたまふも(女車のように御簾を下ろして隠れてお乗りになるのを)、いとあはれに(超法規的価値観の一つの体現たる時代の寵児が法規の権現たる摂政の軍門に下る凋落振りを見るように岳父邸の女房たちは悲しんで)、夢とのみ見ゆ(夢かとばかりに思いました)。*「網代車」は<牛車(ぎっしゃ)の一。車の屋形に竹または檜(ひのき)の網代を張ったもの。四位・五位・少将・侍従は常用とし、大臣・納言・大将は略儀や遠出用とする。(大辞泉)>とある。*「女車」については牛車の乗り方として<男が乗るときは御簾を上げ、女が乗るときは御簾を下ろしている。(Yahoo百科)>とある。まさか源氏が御簾の下から着物の裾を出したとは思えないが、不明。

御方(源氏と葵の上夫婦がお使いに為った部屋は)、いと寂しげにうち荒れたる心地して(そのまま他に使う者も無いのでとても寂しげに荒れて行くように思えて)、若君の御乳母ども(若君の乳母たちや)、昔さぶらひし人のなかに、まかで散らぬ限り(昔から使えた者の内で宿下がりをしなかった者だけが)、かく渡りたまへるをめづらしがきこえて(源氏の御越しをめづらしがり申し上げて)、参う上り集ひて見たてまつるにつけても(お部屋に参じ集い源氏を押し奉るにつけても)、ことにももの深からぬ*若き人びとさへ(特には事情を深く知らない若い女房達でさえ)、世の常なさ思ひ知られて(時勢の移ろいを窺い知って)、涙にくれたり。*「若き人びと」はせいぜい20歳代前半だろうが、葵上の早世でも4年前、源氏との結婚は其の10年前で今から14年前の事になる。源氏自身も既に26歳なので、30歳以上の女房でないと深い事情は分からない。因みに葵上は産後の肥立ちが悪くて、というより物語上は妊娠中の憂さ晴らしで出かけた葵祭での車争いで葵上一行の非礼を根に持った六条御息所の祟りで、出産後まもなく亡くなったので、若君は数えて5歳という事に為る。

若君はいとうつくしうて(若君はとても可愛らしくて)、戯れ(され、じゃれて)走りおはしたり(源氏の許に走って御出でに為ります)。「久しきほどに、忘れぬこそ、あはれなれ(感心な事だ)」とて(と仰って)、膝に据ゑたまへる御けしき(源氏が若君を膝に座らせなさるお姿は)、忍びがたげなり(別れが忍び難い御様子でした)。<すると、>大臣(おとど、致仕の大臣である岳父が)、こなたに渡りたまひて(此方の舎殿にお渡りになられて)、対面したまへり(対面なさいました)。

「つれづれに籠もらせたまへらむほど(二条院で光君が御暇に為さっている時にでも)、何とはべらぬ昔物語も、参りて、聞こえさせむと思つたまへれど(懐かしい昔話でも伺って御話し申し上げようかと思つたのですが)、身の病重きにより(病が重いからと言って)、朝廷にも仕うまつら

ず(御所へも出仕せず)、*位(くらみ)をも返したてまつりてはべるに(大臣職さえ返上致しておりますのに)、 *注にく「位」は官職をさす。位階ではない。>とある。辞職しても、この人の貴族としての地位は恐らく正二位だと思うが、それに見合う土地や使用人や生活費などは朝廷から支給された、ようだ。ただし職権はなくなる。というか、右大臣が摂政大臣として名実共に実権を握っていたので、岳父が左大臣の座に留まっても既に誰も言う事を聞かない状態だった、のだろう。

私ざまには腰のべてなむと(私用では気ままに出歩いているようだ)、ものの聞こえひがひがしかるべきを(在らぬ疑いも掛けられそうで)、今は世の中憚るべき身にもはべらねど(今では何も世間に遠慮の要らない立場では御座いますが)、厳早き(いちはやき、揚げ足取りの厳しい取締りの)世のいと恐ろしうはべるなり(この情勢を非常に危惧して自重したのです)。*かかる御ことを見たまふるにつけて(斯かる御身の不遇を拝察仕つりますれば)、命長きは心憂く思うたまへらるる世の末にもはべるかな(長生きが厭わしく思われる世の末でも御座いましょうか)。 *「かかる御事」については<源氏の除名処分と自主的須磨退去をさす>と注にある。が、免職明示の記述は今までに無く、根拠不明の注釈。源氏勢の全般的な不遇と更に追い込まれそうな記述なら「賢木」の後編に在ったし、自主的須磨退去の決意は本編で既に語られたので、謀反嫌疑の危機は確かそうだが除名の断定は疑問。

天の下をさかさまになしても(天地をさかさまにしても)、思うたまへ寄らざりし御ありさまを見たまふれば(思いも寄らない御不遇を拝見いたしますと)、よろづいとあぢきなくなむ(全てが何の甲斐も無く丸で詰まらないものになります)」と聞こえたまひて(と御挨拶申し上げて)、いたうしほたれたまふ(すっかり気落ちして御出でです)。

「とあることも、かかることも、前の世の報いにこそはべるなれば(其れも是も前世の報いなら)、言ひもてゆけば(言ってみれば)、ただ(詰まる所)、みづからのおこたりになむはべる(自製の至らなさなのでしょう)。*さして、かく、官爵を取られず(さしてはつきりと官位を剥奪されるほどではなく)、あさはかなることにかかづらひてだに(軽微な罪に関っただけでも)、朝廷のかしこまりなる人の(お上から咎めを受けた人が)、現し様にて(うつしざまにて、出家もせずに)世の中にあり経るは(浮世暮らしを続けるのは)、咎重きわざに(罪の重い仕業と)人の国にもしはべるなるを(地方でも処罰しているというのに)、遠く放ちつかはすべき定めなどもはべるなるは(島流しなどの罰を受けるともなれば)、さま異なる罪に当たるべきにこそはべるなれ(ただならぬ罪を犯したという事になるのでしょう)。濁りなき心にまかせて(私はそのような大罪を犯した身の覚えは在りませんが、身の潔白の心のままに)、つれなく過ぐしはべらむも(平然と宮処暮らしを続けていては)、いと憚り多く(右大臣家の手前は差し障りが多く)、これより大きな恥にのぞまぬさきに(春宮にまで災いが及んで之より大きな辱めに遭う前に)、世を逃れなむと思うたまへ立ちぬる(攻撃の矛先を逃れる為に都を離れようと決心しました)」など(などと源氏は大殿に)、こまやかに聞こえたまふ(詳しく御話し申し上げなさいました)。 *此処の文について注釈はく「さして」は、特定して、はつきりとしての意。『集成』は「これと言った理由で私のように官位を剥奪されるというのではなく」の意に解し、『完訳』も「はつきりと私のように官位を取りあげられるのでなく」の意に解す。>とある。しかし此処の記述は普通に「さして、かく」を読めば<さして斯くの如く>なのだから、其の後に続く「官爵を取られず」まで通せば<そのように歴然と爵位剥奪の罰に値するほどでなくても>という一般論を述べている事になる。その上で源氏は、自分は無実だが、目立って標的にされては適わないから都を離れる、と述べている。読者には源氏の不貞の大罪が明かされているが、物語中の世間には秘密は漏れていない。でなければ、この物語は

忽ち一卷の終わりである。源氏がこの台詞を言う時に念頭にあるのは、六姫との密通露見だけである。六姫は尚侍であり、帝の女である。そんな女との密通は源氏で無ければ不可能だし、大后側も六姫を庇う事情と肝心の今上帝が実弟の源氏を然程憎んでいない実態からして、朝廷は源氏と六姫の双方に出仕御免の自宅謹慎を申し付けた、のだと私は思う。六姫との密通は歴然としているのに、源氏は「濁りなき心にまかせて」いても居られないので中央を離れます、という軽さである。内心は「濁りなき心」だと言っているようなものではないか。このふてぶしきは源氏には一貫して、男女の仲は想いであって良し悪しでは無いという信念とも言うべき律儀さで、之は藤壺との不倫に於いても揺るぎ無い。其の「揺るぎ無さ」の拠り所は、王家血筋という自尊心だけが身寄りの無い源氏の唯一の生甲斐であろう事からもたらされているという設定、とは末摘花巻でもノートした。なるほど表立って処罰しようとしたら元々が、到底「かく官爵を取られ」るくらいで済む話ではないのだろう。

昔の御物語(昔話のあれこれや)、院の御こと(院の思い出)、思しのたまはせし御心ばへなど(御遺言なされた院の御気持ちなどを)聞こえ出でたまひて(御話し申されて)、御直衣の袖もえ引き放ちたまはぬに(大臣は涙を拭う袖を引き放しなさいませんでしたが)、君も、え心強くもてなしたまはず(源氏もとても気丈ではいられずに涙を誘われて御出ででした)。若君の何心なく紛れありきて(若君が無邪気に歩き回りなさって)、これかれに馴れきこえたまふを(大臣や源氏に纏い付きなざるのを)、いみじと(いじらしく)思いたり(おぼいたり、御思いになりました)。

「過ぎはべりにし人を(亡くなりました娘を)、世に思うたまへ(天命と思いましても)忘るる世なくのみ(忘れる事が出来ずに)、今に悲しびはべるを(今でも悲しんでおりますが)、この御ことになむ(この時勢の移ろいに際して)、もしはべる世ならましかば(もし娘が生きて居りましたならば)、いかやうに思ひ嘆きはべらまし(どれほど嘆き悲しんだことでしょうか)。よくぞ短くて(よくぞ短命で)、かかる夢を見ずなりにけると(こうした悪夢を見ずに済んだものと)、思うたまへ慰めはべる(思いまして慰めとしております)。

幼くものしたまふが(まだ幼くていらっしゃる若君が)、かく齡過ぎぬるなかに(このような歳を取った祖父母の家に)とまりたまひて(残されなさって)、なづさひきこえぬ月日や(君に懐き申上げられない月日が)隔たりたまはむと思ひたまふるをなむ(長くなってしまうと思ひ申し上げる事だけが)、よろづのことよりも、悲しうはべる(何より悲しいのです)。

いにしへの人も(昔の時代には)、まことに犯しあるにてしも(本当に罪を犯した人でも)、かかることに当たらざりけり(このような目には遭わなかったでしょう)。なほさるべきにて(やはり然うなるべき前世からの因縁で、冤罪を被るのかもしれませんが)、人の朝廷(ひとのみかど、外国の政府)にもかかるたぐひ多うはべりけり。されど(それでもそういう場合でも)、言ひ出づる節ありてこそ(謀反を言い立てる根拠があつてこそ)、さることもはべりけれ(そういう事にもなるので)しょうが)、とざま、かうざまに(今は兎にも角にも)、思ひたまへ寄らむ(そんな疑いを掛ける)かたなくなむ(事など無いというのに)」など(などと大臣は)、多くの御物語聞こえたまふ(多くの御話しを致し為さいました)。

三位中将(さんゐのちゅうじゃう)も参りあひたまひて(も来合わせ為されて)、大御酒(おほみき、お酒)など参りたまふに(など召し上がっては)、夜更けぬれば(夜更けになったので)、泊まりたまひて(源氏は大殿にお泊りなさって)、人びと御前にさぶらはせたまひて(親しい女房の

数人を寝屋の前に控えさせて)、物語などせさせたまふ(談話などを為させなさいます)。人よりはこよなう忍び思す(中でも一番に源氏が密かに可愛がって居らした)中納言の君(女房が)、言へばえに(言葉に出来ないほど)悲しう思へるさまを(悲しんでいる様子を)、人知れずあはれと思す(内心で労しく御思いに成ります)。人皆静まりぬるに(他の女房たちがみな寝静まってから)、とりわきて語らひたまふ(源氏はこの女房をゆっくり慰めなさいました)。これにより泊まりたまへるなるべし(この事の為にお泊りになったようで御座いました)。

明けぬれば(夜が明けてしまいそうなので)、夜深う出でたまふに(まだ暗い内にお帰りに成りますが)、*有明の月いとをかし(有明の月がとても綺麗でした)。花の木どもやうやう*盛り過ぎて(春の花の木々が何時しか盛りを過ぎて)、わづかなる木蔭の(少し咲き残った花が葉陰から顔を覗かせて)、いと白き庭に薄く霧りわたりたる、そこはかたなく霞みあひて、秋の夜のあはれにおほくたちまされり(秋の夜の趣き深い風情にはるかに優れた気色でした)。 *「有明の月」は月齢16日以降の月末までなら夜明けまで月が出ているので可能だろうが、「いとおかし」かった姿と三月二十日余りの須磨行きの数日前という事から、立ち待ち月(17日月)、居待ち月(18日月)、寝待ち月(19日月)辺りを見当つける。中でも「み待ち月」が<夜明かし>の意で「明石」に掛かる枕詞という事なので、「須磨」に惜しいと18日を最有力に仕立てようとしても、本文の「三月二十日あまりのほど」の「二、三日かねて」を素直に読めば、正に3月20日を考えるべきかもしれない。 *陰暦晩春3月20日前後はおよそ新暦の4月下旬だろうか。桜も「盛りを過ぎ」る頃。

隅の高欄におしかかりて(源氏は角近くの欄干に寄り掛かりなさって)、とばかり、眺めたまふ(少しの間、庭を眺めて御出ででした)。中納言の君、見たてまつり送らむとにや(御見送り申し上げようとしてでしょうか)、妻戸おし開けてあたり(妻度を押し開けて戸口に座っていました)。

「また対面あらむことこそ、思へば(また何時か会えるかと思えば)いと(それはとても)難けれ(かたけれ、難しい)。かかりける世を知らで(こういう事態になるとは思わず)、心やすくもありぬべかりし月ごろ(いつでも会えたであろうこの月日は)、さしも急がで、隔てしよ(そう急ぐ事も無いと思って、つい来そびれてしまっていた)」などのたまへば(などと源氏が御言いに為ると中納言の君は)、ものも聞こえず泣く(何も申せず泣きます)。

(そうしていると、)若君の御乳母の宰相の君して、宮の御前より(大宮からの)御消息聞こえたまへり(ご挨拶が御座いました)。「身づから聞こえまほしきを(直接ご挨拶申し上げたいのですが)、かきくらす乱り心地(悲しみに取り乱す気持ちの)ためらひはべるほどに(整理がつかない内に)、いと夜深う(まだ暗い夜明け前に隠れるように)出でさせたまふなるも(御帰りに成ると言うのも)、さま変はりたる心地のみしはべるかな(時勢が変わり果ててしまった様にばかり思われる所です)。心苦しき人の(劳しい幼子が)いぎたなきほどは(寝入っていますので)、しばしもやすらはせたまはで(もう少しゆっくり為さいませんか)」と聞こえたまへれば(ということでしたので)、うち泣きたまひて(源氏もつい涙ぐまれて)、

「鳥辺山燃えし煙も紛ふ(まがふ、似ている)やと、海人の塩焼く浦見にぞ行く」(和歌 12-01)

「火葬の煙を追い掛けて、塩焼く浦を見に行きます」(意識 12-01)

御返りともなく(返礼という事でも無くこの歌を)うち誦じたまひて(口ずさみなさって)、「暁の別れは(夜明け前の別れは)、かうのみや(いつでもこんな風に)心尽くしなる(胸が一杯になるものだろうか)。思ひ知りたまへる人もあらむかし(皆さんの中には、分かる女房も居る事でしょう)」とのたまへば(と仰って)、

「いつとなく、別れといふ文字こそ(何時という事も無く別れと言う文字自体が)うたてはべるなるなかにも(厭なものでは在る中でも)、今朝はなほ(今朝は特に)たぐひあるまじう思うたまへらるるほどかな(例えようも無く惜しまれることだ)」と、鼻声にて、げに浅からず思へり(実に深く悲しんでいらっしやいました)。

「聞こえさせまほしきことも(私こそ直に御話し申し上げたいとも)、返す返す思うたまへながら(何度も思い申し上げながら)、ただに(どうしても)結ぼほれはべるほど(絡んだ気持ちが整理出来ずに何から御話しして良いか分からなくなって居りました事を)、推し量らせたまへ(どうかお察し下さい)。いぎたなき人は(寝入っている子は)、見たまへむにつけても、なかなか(会えば却って)、憂き世逃れがたう思うたまへられぬべければ(未練が募るように思われますので)、心強う思うたまへなして(あえて気強く振り切って)、急ぎまかではべり(急いで帰る事に致します)」と聞こえたまふ(と源氏は大宮への御返事を宰相の君に言伝なさりました)。

出でたまふほどを(源氏が御帰りになる御姿を)、人びと覗きて見たてまつる(女房たちは其々の廂から半蔀の格子戸や几帳の隙から顔を出してお見送りしました)。入り方の月いと明きに(あかきに、明るく映えて)、いとどなまめかしうきよらにて(源氏がいつそう優雅に美しく)、ものを思いたるさま(憂いを湛えた様子に)、虎、狼だに泣きぬべし(前門の虎や後門の狼でさえ思わず感じ入ったでしょう)。まして(まして葵の上の女房たちは)、いはけなくおはせしほどより見たてまつりそめてし人びとなれば(源氏が12歳で初床入りした初々しい時から御仕えしてきた人たちのので)、たとしへなき御ありさまをいみじと思ふ(例え様も無い源氏の不遇な変わり振りを身に染みて悲しく思いました)。まことや(実にしめやかでしたが)、御返り(大宮からの御返歌はこう在りました)、

「亡き人の別れやいとど隔たらむ、煙となりし雲居ならでは」(和歌 12-02)

「別れがますます遠くなる、煙も都を後にする」(和歌 12-02)

取り添へて(故姫の早世に加えて)、あはれのみ尽きせず(殿の不遇な都落ちの別れに悲しみだけが尽きず)、出でたまひぬる名残(御帰りになった名残に)、ゆゆしきまで泣きあへり(大殿の女房たちは邸全体が沈み込むほど泣き合っていました)。

[第三段 二条院の人々との離別]

殿におはしたれば(二条院に御帰りに成ると)、わが御方の人びとも(源氏の住まいである東の対の女房たちも)、まどろまざりけるけしきにて(源氏が大殿に別れの挨拶に行った事から須磨行きが近い事を察して先行きを案じたのか、その事の隠密性から夜陰に紛れての御帰りを思っか、

寝ずに待っていたようで、所々に群れみて(持ち場ごとに集まり控えて)、あさましとのみ世を思へるけしきなり(嘆かわしいばかりに世の移ろいを思っているようでした)。

侍には(侍所の男衆は)、親しう仕まつる限りは(源氏に私的に親しく使えている者に限っては)、御供に参るべき心まうけして(須磨行きのお供を仕る心算で)、私の別れ惜しむほどにや(家族と別れを惜しむ為に下がっているのか)、人もなし(誰も居ません)。さらぬ人は(私的ではなく役目柄で邸に出入りしていた者は)、とぶらひ参るも重き咎めあり(挨拶に来るだけでも謀反に関わりがある疑いを向けられて重い責めを負いかねず)、わづらはしきことまされば(負担が大きすぎたので訪ね来る者も無く)、所狭く集ひし馬、車の方もなく、寂しきに、「世は憂きものなりけり(嫌な世の中になったものだ)」と、思し知らる(源氏は思い知りなさいました)。

台盤(だいばん、台所)なども、かたへは塵ばみて(半分は使われずに塵が積り気味で)、畳、所々引き返したり(畳が汚れないように所々裏返されていました)。「見るほどだにかかり(旅立ち前の今でさえこの有様だ)。ましていかに荒れゆかむ(まして旅立って留守になったら何処まで荒れてゆく事だろう)」と思す(と御思いに成ります)。

西の対に渡りたまへれば、御格子も参らで(夫人が薮戸も閉めずに)、眺め明かしたまひければ(外を眺めながら源氏を夜通しお待ち申しなさっていたので)、簀子などに(部屋に下がらず軒先辺りに)、若き童女、所々に臥して、今ぞ起き騒ぐ(慌てて起き騒ぎました)。宿直姿どもをかしょうてゐるを見たまふにも(その童女たちが寝巻き姿で可愛らしく控えるのを御覧に成っても)、心細う(源氏は先を憂いて)、「年月経ば、かかる人びとも、えしもあり果てでや(何時までもこうしては居られずに)、行き散らむ(散り去るのだろう)」など、さしもあるまじきことさへ(今まで考えた事も無かったような事まで)、御目のみとまりけり(目に付きなさいました)。

「昨夜は(よべは、ゆうべは)、しかしかして(これこれの事があって)夜更けにしかばなむ(夜を明かしてしまいました)。例の思はずなるさまにや(また心無い真似でもしているのかと)思しなしつる(思いなして居ましたか)。かくてはべるほどだに(せめて京に居る内だけは)御目離れずと思ふを(ずっと一緒に居たいと思いますが)、かく世を離る際には(いざ京を離れるという事になると)、心苦しきことのおのづから多かりける(気掛かりな事がどうしても多く在って)、ひたやごもりにてやは(引き籠もっている訳にも、行きません)。常なき世に(どうなるか分からない世の中だからこそ)、人にも情けなきものと(縁在った人から情けない者だと)心おかれ果てむと(思われて死ぬのは)、いとほしうてなむ(心残りでなりませんから)」と聞こえたまへば(と源氏が御話しになると)、

「かかる世を見るよりほかに(こうした世情の不遇を思う悲しみの他に)、思はずなることは(心無い真似とは)、何ごとにか(何か在るのでしょうか)」とばかりのたまひて(とだけお応えになって)、いみじと思し入れたるさま(無念そうに為さる夫人の姿が)、人よりことなるを(人一倍であったのは)、ことわりぞかし(訳が在りました)、

父親王(ちちみこ、兵部卿宮であった夫人の父君は)、いとおろかに(源氏夫婦をかなり疎遠にもとより思しつきにけるに(元々から御思いであったが)、まして、世の聞こえをわづらはしがり

て(謀反の嫌疑が掛かる源氏と関って不評の起つのを恐れて)、訪れきこえたまはず(手紙の遣り取りも為さらず)、御とぶらひにだに渡りたまはぬを(お別れのご挨拶にもお見えにならないのを)、人の見るらむことも恥づかしく(夫人はその上辺の付き合いを人に知られることも身の置き所が無く)、なかなか(却って葵上の早世後に源氏から正妻に迎えられるまで世間に素姓が伏せられていたが)知られたてまつらでやみなましを(そのまま父親王方にも自分の存在を知られずに居て欲しかったほどなのに)、

継母の北の方などの、「にはかなりし幸ひのあわたたしさ。あな、ゆゆしや(付け焼刃の幸せの脆さとは、何と怖ぞましいものでしょう)。思ふ人(あの子は大事な人と)、方々につけて(母、祖母、良人と次々に)別れたまふ人かな(別れる運命の人かしら)」とのたまひけるを(と仰ったというのを)、さる便りありて漏り聞きたまふにも、いみじう心憂ければ(その心無さに心底厭気がさして)、これよりも絶えて訪れきこえたまはず(夫人の方から御連絡を差し上げる事は在りませんでした)。また頼もしき人もなく(とはいえ夫人には他に頼るべき人も無く)、げにぞ(それはもう実に)、あはれなる御ありさまなる(御可哀相な御身の上で御座います)。

「なほ世に許されがたうて(政治犯の罪が許されないまま)、年月を経ば(幾年月を重ねる事になるようなら)、巖の中にも(いはほのなかにも、惨めな洞窟暮らしであっても離れているよりは)迎へたてまつらむ(共に過ごすべく貴女をお迎えいたします)。ただ今は、人聞きのいとつきなかるべきなり(謹慎らしからぬと人聞きが悪くなるのです)。朝廷に(おほやけに、政府に)かしこまりきこゆる人は(遠慮して身を慎み申し上げる者は)、明らかなる月日の影をだに見ず(晴れがましさを憚り)、安らかに身を振る舞ふことも(呑気に暮らすことさえ)、いと罪重かなり(とても罪が重くなるものです)。

過ちなけれど(私には謀反の企てなど無いが)、さるべきにこそ(ただ前世の宿縁によって)かかることもあらめと思ふに(このような目に遭うのだろうと思うが)、まして思ふ人具するは(加えて愛妻を連れての旅立ちは)、例なきことなるを(例の無いことなので)、ひたおもむきに(ただひたすら)ものぐるほしき世にて(私を貶めようとしている政府なら)、立ちまさることもありなむ(更に難癖を付けて来る事もあるだろう)」など聞こえ知らせたまふ(などと源氏は夫人を説得なさっていました)。

日たくるまで大殿籠もれり(その後は日が高くなるまで源氏は寝室で横になっていらっしやいました)。*帥宮(そちのみや、源氏の異母弟の親王)、三位中将などおはしたり。対面したまはむとて(御会いになるために)、御直衣などたてまつる(源氏は平服に着替えなさいます)。*「師(そつ、そち)」は大宰府(だざいふ、たいざいふ)の長官だが、親王が就任した場合は名誉職で実務は次官の権師(ごんのそち)または大弐(だいに)が執ったらしい。古語辞典などによると、大宰府は九州北部および壱岐、対馬の管理官だが、当時の主たる外交相手の朝鮮と軍事を含む折衝を担っていた、事実上の全権大役であったようだ。

「*位なき人は(無官の私にはこれが似合いだろう)」とて、無紋の直衣(無地の平服を)、なかなか(中でも)、いとなつかしきを着たまひて(とても着慣れたものをお召しになって)、うちやつれたまへる(慎ましく地味にいらっしやる源氏は)、いとめでたし(とても良い風情でした)。*「位(くらゐ)なき人は」について注釈に<源氏は官位を剥奪されている。>とある。この記述を以って、既に更迭ま

たは辞任させられていた事の明示と知るべき、なのだろうか。むしろ是から自ら左ういう身になろうという源氏が不遇と権勢の移ろいを皮肉ってみせた言い方のようにも思えるが。

御鬢(おんびん、鬢髪を)かきたまふとて(整えなさろうと)、鏡台に寄りたまへるに、面瘦せたまへる影の、我ながらいとあてにきよらなれば(我ながらとても上品で綺麗なので)、「こよなうこそ、衰へにけれ(随分やつれたな)。この影のやうにや瘦せてはべる(こんなに瘦せていたか)。あはれなるわざかな(情けないものだ)」とのたまへば(と源氏が仰ると)、女君、涙一目うけて、見おこせたまへる、いと忍びがたし(夫人が涙を溜めて御覧になる、何とも切ない)。

「身はかくてさすらへぬとも君があたり、去らぬ鏡の影は離れじ」(和歌 12-03)

「別れることは辛いけど、せめて鏡に影を残そう」(意識 12-03)

と、聞こえたまへば(源氏が若妻に贈歌なさると)、

「別れても影だにとまるものならば、鏡を見ても慰めてまし」(和歌 12-04)

「せめて影でも残るなら、鏡の中で会いましょう」(意識 12-04)

柱隠れにみ隠れて(柱の陰に控えてこう返歌なさって)、涙を紛らはしたまへるさま(涙を隠しなさる紫の上の御姿は)、「なほ、ここら見るなかに(やはり今付き合っている女の中で)たぐひなかりけり(最も素晴らしい)」と(と源氏をして)、思し知らるる人の御ありさまなり(思わずには居られない美しさでした)。

親王は(みこは、宮たちは)、あはれなる御物語聞こえたまひて(しみじみと思い出話をしてお別れの挨拶をなさって)、暮るるほどに帰りたまひぬ(夕方に御帰りになりました)。

[第四段 花散里邸に離京の挨拶]

花散里(源氏が住まいを御世話申した故院の女御の里屋敷で、その女御が思い出に生きる身寄りの無い人なので栄華の名残りが漂う所として花散る里と呼んでいる、其の邸に住まう女御の君の妹君で源氏の愛人である女)の心細げに思して(が源氏の離京を心細く御思いになって)、常に聞こえたまふもことわりにて(頻りに手紙を書いて遣すのも道理なので)、「かの人も、今ひとたび見ずは、つらしとや思はむ(あの方にも、もう一度お会いしないと、寂しがるだろう)」と思せば(と御思いになって)、その夜は、また出でたまふものから(また御出掛けに成りますものの)、いとの憂くて(離京の日を明後日にも控えていたので若妻とも離れ難くて)、いたう更かしておはしたれば(だいぶ夜更けてからの御見えでしたが)、

女御(先ず姉の女御の君が)、「かく(こうして旅立ち間際に態々)数まへ(かずまへ、物の数に入れて)たまひて(頂きまして)、立ち寄せたまへること(御別れの御挨拶に御立寄り頂きましたとは、恐縮です)」と、よろこびきこえたまふさま(喜んでお迎えの御挨拶を申し上げた事などは)、書き続けむもうるさし(詳しく申すのも此の際は余計な事で御座いましょう)。

いとみじう心細き御ありさま(それはもう実に心細い御様子で)、ただ御蔭に隠れて(ただ源氏の援助の御蔭でひっそりと)過ぎいたまへる年月(過ごしてこられた年月でしたので)、いとど荒れまさらむほど思しやられて(その頼みの源氏が離京した後はますます荒れ果てて行くように思われて)、殿の内、いとかすかなり(邸の中は静まり返っていました)。

月おぼろにさし出でて、池広く、山、木深きわたり(こぶかきわたり、木が深く茂渡った)、心細げに見ゆるにも(心細げな庭の景色を眺めていると)、住み離れたらむ(源氏は離京してからの)巖のなか(侘しい須磨暮らしが)、思しやらる(思い遣られます)。

*西面は(にしおもては、西母屋の妹君は)、「かうしも渡りたまはずや(こうなってはもう殿は御見えにならないだろう)」と、うち屈して(うちくして、すっかり項垂れて)思しけるに(諦めて居らしたが)、あはれ添へたる月影の(風情を添える月光が)、なまめかしうしめやかなるに(優美にしつとりと映し出す)、うち振る舞ひたまへるにほひ(源氏が姿を御見せになる時に薫り立つ気配は)、似るものなくて(例え様も無く素晴らしく)、いと忍びやかに入りたまへば(そっと静かに部屋にお入りに為ると)、すこしみざり出でて(妹君も少し膝を進めて)、やがて月を見ておはず(二人で月を御覧に為ります)。 *注に<寝殿の西側に住む三の君(花散里)をいう。>とある。東西5間の母屋の中央を馬道で区切って、2間間口同士で姉妹が住み分けていた、くらいだろうか。

またここに御物語のほどに(そのまま其処で御話しを為さり合う内に)、明け方近うなりにけり(明け方近くになってしまいました)。

「短か夜のほどや(何と短い夜だこと)。かばかりの対面も(こんなちょっとした対面も)、またはえしもやと思ふこそ(もう出来ないかと思うと)、ことなしにて過ぎしつる年ごろも悔しう(是と言う事も無く過ごしてしまった年月が勿体無くも思えますが)、来し方行く先のためしになるべき身にて(過去未来に渡って世の手本を示すべき堅苦しい立場だったので)、何となく心のどまる世なくこそありけれ(そう気ままには出来ませんでした)」

と、過ぎにし方のことどものたまひて(過ぎた日の思い出を御話しなさって)、鶏もしばしば鳴けば、世につつみて急ぎ出でたまふ。例の(此処でも在らぬ疑いを避けるべく源氏は夜陰に紛れて御帰りになるので)、月の入り果つるほど(ちょうど月が山際に隠れるのと同時になって)、よそへられて、あはれなり(どちらも似た者同士で寂しげでした)。

女君の*濃き御衣に映りて(風情ある月光が女君の赤い着物に照り映えて)、げに(いかにも古歌に有る様な)、*漏るる顔なれば(涙顔だったので)、 *「濃き御衣(こきおんぞ)」について「濃き色」が<染め色や織り色の名。濃い紫色。また、濃い紅色。(大辞泉)>とあるので、<赤い着物>として置く。 *「漏るる顔(ぬるるがほ)」については<『源氏積』は「あひにあひて物思ふころの我が袖に宿る月さへ濡るる顔なる」(古今集恋五、七五六、伊勢)を引歌として指摘する。>と注にある。必脚である。この引歌の誘い水は源氏が夜陰に隠れて帰る姿と月が山陰に入る姿が「よそへられて(見比べると)」「相似合って(あひにあひて)」いるという記述から、当時の宮廷人の学識に呼び起こされたものなのだろう。「あひにあひて」を<逢いに合いて(どうしても逢いたくて、逢える日を思って)>と複意付けても付けなくても、「物思ふ」恋心が感極まって泣けて来て、袖に歪んで照り返した月明かりの涙顔のようだった、という感傷に耽る歌である事には変わりはない。

「月影の宿れる袖はせばくとも、とめても見ばやあかぬ光を」(和歌 12-05)

「月の光りの照り返し、狭い袖でも見飽きない」(意識 12-05)

*この歌の表面は前出の「濡るる顔」の古歌を下敷きにしている。其の表面の情感を其のまま生かしながら「月影の宿れる袖はせばくとも」という言葉に<源氏が当家に泊まる事は滅多に無いが>という暗意を込めて、「とめても見ばやあかぬ光を」という言葉に<その榮譽を何時までも忘れない>といういじらしさを滲ませている、のだろう。

いみじと思いたるが(そう詠んで悲しんでいる女君が)、心苦しければ(痛々しかったので)、かつは慰めきこえたまふ(源氏の方は悲嘆に暮れるよりも女君を慰め申されます)。

「行きめぐりつひにすむべき月影の、しばし雲らむ空な眺めそ (和歌 12-06)

「いつかは晴れる月影を、思い詰めてもきりが無い (意識 12-06)

*この返歌も月影の空模様を詠んだ言葉で受け応えしながら、歌意に別離の慰めを込めている。「行きめぐり(雲行きは色々変わるが)つひにすむべき月影の(いつかは澄んで見える月影だから)しばし雲らむ(少し曇っているからといって)空な眺めそ(空模様を心配するな)」という表面で、<都落ちしても何時かは疑いが晴れるだろうから暫しの不遇を悲観するな>と宥めている、のだろう。

思へば、はかなしや(どちらにしても移ろい易いものだ)。ただ、知らぬ涙のみこそ(晴れる日を知らない涙ばかりが)、心を昏らす(こころをくらす、気持ちや心を塞ぎ込ませる)ものなれ(ものなのだろう)」などのたまひて(などと源氏は仰って)、明けぐれのほどに出でたまひぬ(まだ夜明け前の暗い内に御帰りになりました)。

[第五段 旅生活の準備と身辺整理]

よろづのことども(其の日はいよいよ旅立ちの準備万端を)したためさせたまふ(整えなさせ為さります)。親しう仕まつり(私的な使用人で)、世になびかぬ限りの人びと(政府の意向を受けない者の中から)、殿の事とり行なふべき(家計を預かるべき)上下(かみしも、管理と実務の役目柄を)、定め置かせたまふ(お決めに為ります)。御供に慕ひきこゆる限りは(須磨行きに随行員を勤め申す者については)、また選り出でたまへり(さらに特別に選り出しました)。

かの山里の御住みかの具は(須磨での生活用具は)、えさらず(どうしても)とり使ひたまふべきものども(必要な物だけを)、ことさらよそひもなく(特に飾り気もなく)ことそぎて(簡素にして)、さるべき(目ぼしい)書ども(ふみども、漢書類)*文集など(もんじふなど、白氏文集など)入りたる箱、さては(その他には)琴一つぞ(きんひとつぞ、七弦琴一張りを)持たせたまふ(待たせなさいます)。所狭き御調度(大量の道具類や)、はなやかなる御よそひなど(贅沢な装飾品などは)、さらに具したまはず(一切お持ちにならず)、あやしの(身分の低い)山賤めきて(やまがつめきて、田舎者の様な格好を)もてなしたまふ(態と為さいます)。 *「白氏文集」については<唐の白居易の詩文集。元稹(げんしん)編の「白氏長慶集」50巻(824年成立)に自選の後集20巻、続後集5巻を加えたもの。現本は71巻と目録1巻。日本には平安時代に伝来し、「文集(もんじゅう)」と称され、愛読された。(大辞泉)>とある。

さぶらふ人びとよりはじめ(女房たちをはじめ)、よろづのこと(東の対で管理していた二条院の一切合財を)、みな西の対に聞こえわたしたまふ(全て西の対の若妻の管理下に預け願い申して移しなさいます)。領じ給ふ御荘(りやうじたまふみしやう、御所領の荘園)、御牧(みまき、牧場)よりはじめて、さるべき所々(その他の領地や)、券など(証券類など)、みなたてまつり置きたまふ(全てまとめて預け置きなさいます)。

それよりほかの(更にその他の)御倉町(みくらまち、倉庫群や)、納殿(をさめどの、宝物室)などいふことまで(などについてまで)、少納言をはかばかしきものに見置きたまへれば(紫の上の筆頭女房の少納言の器量を見込んで総監督に任じなさって)、親しき(信用できる)家司ども(けいしども、経理員たちを)具して(配下に付けさせて)、しろしめすべきさまども(夫人が取り締まるべき事柄を)のたまひ預く(源氏は説明して委託なさいました)。

わが御方の(東の対で仕えて源氏の御手付きだった)中務(なかつかさ)、中将(ちゅうじやう)などやうの人びと(などといった女房たちは)、つれなき御もてなしながら(西の対の若妻に仕える立場に成る処遇に不満で)、見たてまつるほどこそ慰めつれ(源氏の側仕えをすることを励みにして来たので)、「何ごとにつけてか(何故そんな事をしなければならないのか、分からない)」と思へども、

「命ありてこの世にまた帰るやうもあらむを(生きてまたこの世に帰る事もあるだろうからと)、待ちつけむと思はむ人は(私を待っていていようと思う者は)、こなたにさぶらへ(西の対の妻に御仕え申せ)」とのたまひて(と源氏は仰って)、上下(かみしも、上位の者から下位の者まで)、皆参う上らせたまふ(皆を西の対に参上させなさいました)。

若君の御乳母たち(大殿に居る若君の乳母たちや)、花散里なども(花散里の姉妹などにも)、をかしきさまのは(めずらしい贈り物は)さるものにて(其れは其れとして)、まめまめしき筋に思し寄らぬことなし(細々とした日用品まで行き届かない事は有りませんでした)。

尚侍の御許に(ないしのかみのおんもとに、尚侍である右大臣家の六姫にはこの非常時に慎むべき処を押して)、わりなくして聞こえたまふ(源氏は止むに止まれず御手紙を差し上げます)。

「問はせたまはぬも(御連絡の無いのも)、ことわりに思ひたまへながら(当然とは存じますが)、今はと(今は之までと)、世を思ひ果つるほどの(不遇を諦めて離京する)憂さもつらさも(無念さも悲しみも)、たぐひなきことにこそはべりけれ(例え様も無いものです)。

逢ふ瀬なき涙の河に沈みしや、流るる漚の初めなりけむ (和歌 12-07)

沈む早瀬の始まりに、逢えぬ定めを思い知る (意識 12-07)

*注に<源氏の贈歌。「流るる」に「泣かるる」を掛け、「みを」に「漚(水脈)」と「身を」を掛ける。「瀬」「川」「流るる」「漚」は縁語。>とある。「漚」については<浅い湖や遠浅の海岸の水底に、水の流れによってできる溝。河川の流れ込む所にできやすく、小型船が航行できる水路となる。また、港口などで海底を掘って船を通りやすくした水路。(大辞泉)>とある。また古語辞典に「水尾」を詠んだ参照句として万葉集 1108 番の「泊瀬川(はつせがは)

流水尾之(ながるるみをの) 湍乎早(せをはやみ) 井提越浪之(みでこすなみの) 音之清久(おとのきよけく)」が掲載されていたが、この歌は意外に当歌の下句の下敷きになっている気がする。否に物理的な歌で、穿れた川底で早くなった水流が次の堰石を越える時に立てる衝撃音が高音で涼しげにせせらぐ、という冷静な観察。多分、川面で聞く水音は川底へ沈む摩擦音は遠ざかるので低くなり、せり上がる時の摩擦音は近付くので高くなる、のだろう。ドップラー効果である、いや多分。その冷静さが不要な恨み節を抑えている効果を感じる。とはいえ何せ、六姫と源氏はベッドインの現場を右大臣に目撃されてしまったのだから、その不運を怨む事は出来ても冤罪の誤解を訴え申し上げる立場では元々無いので、惚ける事も開き直す事も無く淡々と冷静に構える外は無かった。その事情を踏まえてこの歌を読めば川の流るるに擬えた表面で、「逢ふ瀬なき(許されない密会を)涙の河に(重ねて濡れていた現場に)沈みしや(踏み込まれたのが)流るる瀾の(流刑となる身の上の)初めなりけむ(契機になってしまいました)」、ということになる。其処に悔いや恨みの言葉が無い事で、変わらぬ恋慕を滲ませている事に為る、のだろう。

と思ひたまへ(とお慕い申す思いが)出づるのみなむ(出て来るばかりですので)、罪逃れがたうはべりける(こんなことでは罪を逃れ難いのも仕方ない訳ですね)」道のほども危ふければ(手紙を遣り取りする道中での文面の露見も危惧されたので)、こまかには聞こえたまはず(詳しくはお書きに為りませんでした)。

女、いとみじうおぼえたまひて、忍びたまへど(六姫は心底感じ入って、気持ちを抑えて御出でに為ったが)、御袖よりあまるも所狭うなむ(止め処なく涙が流れて袖が濡れない所がありませんでした)。

「涙河浮かぶ水泡も消えぬべし、流れて後の瀬をも待たずて」(和歌 12-08)

「浮かんで消える水の泡、手繰り寄せたい涙川」(意識 12-08)

*注に<「涙の河」「瀬」「流る」の語句を用いて返す。「流れて」に「泣かれて」を掛ける。「涙川」「水泡」「瀬」が縁語。>とある。「水泡」は<みなわ>と読むようだが正に<すいほう>で「はかなく消えるものの例え」に違いない。何が「水泡」かと言えば、「思ひたまへ出づるのみなむ」と言って来た<源氏の気持>に他ならない。その<源氏の気持>が「流れて後の瀬をも待たずて(向こう岸に着く前に)」「消えぬべし(消えてしまうだろう)」という言い方で、心変わりしないで欲しいと女心を訴えている、ということだろう。さらに「流れて後の瀬」を<落ち着く先>から<いつか流刑の疑いが晴れて帰京する浮かぶ瀬>とまで穿てば、味方の意を暗に秘める。詰まりは、自分の気持ちは変わらない事を前提にした言い方になっていて、いじらしい。六姫の歌はいつも素直で男心をくすぐると言うか、何か良い。下手をすると商売女風にもなり兼ねないが。

泣く泣く乱れ書きたまへる御手、いとをかしげなり(源氏は無性に心惹かれました)。今ひとたび対面なくやと思すは(もう一度会えないものかと思えば)、なほ口惜しけれど、思し返して、憂しと思しなすゆかり多うて(決して許さない姫の縁者が多くて)、おぼろけならず(細心の注意を払って)忍びたまへば(謹んで居らしたので)、いとあながちにも(それ以上に強いては)聞こえたまはずなりぬ(お手紙も差し上げませんでした)。

[第六段 藤壺に離京の挨拶]

明日とて(あすとて、いよいよ明日が出発という日に)、暮には(夕方までには)、院の御墓拝みたてまつりたまふとて(院の御墓参りを為さろうとして)、北山へ詣でたまふ(北山にお出掛けなさいます)。*暁かけて月出づるころなれば(お出掛けは明け方にかけて月が出る早朝だったので)、まづ、入道の宮に参うでたまふ(墓参りに先立って、入信なさった中宮の三条邸に暇乞いのご挨拶を為さりにお寄りなさいました)。*「暁(あかつき)」は空が明るくなる曙(あけぼの)の前の暗い空の時分をいう、らしい。「暁かけて」はその暗がりから曙になって日の出になる直前までの時間帯を言っているように思う。とすると其の時間帯に「月出づるころ」となる日付は、日の出を5:30くらいだとすれば、4:00~5:00の月の出は月末か新月になってしまう。物語上のこの日は23、24日くらいの見当で月の出は2:00~3:00だから日程の辻褄が合わないが、ざっと人目に付かない早朝という設定とでも受け止めて置く。

近き御簾の前に(宮は御自分の母屋前の御簾に近い廂の間に)御座参りて(おましまりて、源氏の座所を用意させなさって)、御みづから聞こえさせたまふ(直接御話しなさいます)。春宮の御事をいみじうしろめたきものに思ひきこえたまふ(宮は源氏に春宮の後見の事がとても心配でならないと仰います)。かたみに心深きどちの御物語は(お互いに思いが深い者同士の御話しは)、よろづあはれまさりけむかし(全てに感じ入ったことでしょう)。

なつかしうめでたき御けはひの昔に変はらぬに(懐かしく麗しい宮のお姿が昔と変わらないように思えて)、つらかりし御心ばへも(源氏は以前の拒まれた辛さを思い出して)、かすめきこえさせまほしけれど(少し恨み言を云ってみたくもお成りになったが)、今さらにうたてと思さるべし(出家した尼僧相手に今更は面倒とお思いになりました。)、わが御心にも(また御自分自身にあっても)、なかなか(蒸し返すと)今一際(いまひときは、改めて一段と)乱れまさりぬべければ(心が乱れそうだったので)、念じ返して(思い直して)、ただ、

「かく思ひかけぬ罪に当たりはべるも(このような思ってもみなかった謀反の咎を負う破目に成りましたのも)、思うたまへあはすることの(思い当たります処の)一節になむ(ひとふしになむ、一点の因縁かと)、空も恐ろしうはべる(空恐ろしくなります)。惜しげなき身はなきになしても(惜し気無い我が身はどうなるうとも)、宮の御世にだに(春宮の御即位が)、ことなくおはしまさば(事無く執り行われさえすれば、と其れだけを願っております)」とのみ聞こえたまふぞ(とだけ申し上げなされたのも)、ことわりなるや(尤もな事だったでしょう)。

宮も、みな思し知らるることにしあれば(宮も尽く思い知ることだったので)、御心のみ動きて、聞こえやりたまはず(動揺してお返事も出来ません)。大将、よろづのことかき集め思し続けて、泣きたまへるけしき、いと尽きせずなまめきたり(大将が万感胸に迫って御泣きに成る御姿は、どこまでも優美で御座いました)。

「御山に参りはべるを(これから御陵へお墓参りに参りますが)、御ことつてや(御言伝が御座いまいしょうか)」と聞こえたまふに(と源氏がお聞きなさっても)、とみにもものも聞こえたまはず(宮は咄嗟にはお応え為されず)、わりなく(何とか)ためらひたまふ御けしきなり(落ち着こうと為さる御様子でした)。

「見しはなくあるは悲しき世の果てを、背きしかひもなくなきぞ経る」(和歌 12-09)

「供養の甲斐も無いままに、力の無さを思い知る」(意識 12-09)

*注にく藤壺の贈歌。「見し」は桐壺院、「有る」は源氏、「そむきし」は藤壺をさす。「なく」に「泣く」と「無く」とを掛ける。『異本紫明抄』は「あるはなく無きは数そふ世の中にあはれいづれの日まで嘆かむ」(新古今集哀傷、八五〇、小野小町)を引歌として指摘する。>とある。引歌の韻の心地よさは確かに踏襲したくなる。また宮と源氏の今の境遇からしても、「あるはなく(能吏は亡くなり)無きは数そふ(その失われた者の数が増える)世の中に(この権勢に)あはれいづれの(ああ我は何時の)日まで嘆かむ(日まで嘆く事になるのだらう)」、というこの引歌は如何にも下敷きにしたいくなりそうな意味に思える。そこで当歌は歌意諸共に引歌の語呂の良さに倣って、「見しはなく(寄り添った院は亡くなり)あるは悲しき(後見の源氏は不遇に悲しんでいる)世の果てを(この時勢の果敢無さを)背きしかひも(出家した甲斐も)なくなきぞ経る(無く泣いて暮らしています)」、と重ね韻を畳み掛けている。

いみじき御心惑ひどもに(とても身に染みて御悲しみ為さる同士なので)、思し集むることどもも(上手く思いを纏め上げて)、えぞ続けさせたまはぬ(歌を御詠みには為れません)。

「別れしに悲しきことは尽きにしを、またぞこの世の憂さはまされる」(和歌 12-10)

「別れの涙拭いた後、本当のつらさ思い知る」(意識 12-10)

*注にく源氏の返歌。「悲しき」の語句を用いて返す。「この」に「子の」を響かせ、東宮を暗示する。>とある。この歌も贈歌に倣った重ね韻に趣を置いて、「別れし(亡き院にお別れした時に)」「悲し(悲しいことの)」「尽きにし(極みかと思いましたが)」と連ねて其れにも関わらず、「またぞ(更にこの先々の)」「まされる(心配は増すばかりです)」と畳み掛ける。

[第七段 桐壺院の御墓に離京の挨拶]

*月待ち出でて出でたまふ(待っていた月が出たので墓参りに北山に向かってお出掛けなさいます)。*墓参りだから殊更に陽を避けて陰の月の出で描写した、のだろうか。月齢24日頃の月の出は遅く見ても3:00くらいで真夜中である。しかし既に「暁かけて」とあったので、これは日の出の早朝の時分に違いない。太陽光を地球が照り返して月の夜側がきれいに見えて居た時分だったのかも知れないが、然うだったとしたら其れらしく書くべきではないのか。晦日ないし朔月間近だから空を明るくしているのは直射日光だったはずで、陰暦の生活感が掴み切れない所為か、どうもこの記述は作爲的に思えてしまう。

御供にただ五、六人ばかり、下人も(しもびと、小間使いも)むつましき限りして(見知った者ばかりで)、御馬にてぞおはする(御車では無く御馬でお出掛けになります)。さらなることなれど(今更ながら)、ありし世の御ありきに異なり(かつての要人たる麗々しい行列とは打って変わった質素な墓参りに)、皆いと悲しう思ふなり(皆それは悲しく思いました)。

なかに(その中に)、かの御禊の日(かのみそぎのひ、あの車争いがあった4年前の齋院の御禊の日)、仮の御隨身にて仕うまつりし(隨身を勤めるには高官すぎたが特例として源氏大将の隨身を務めた)*右近の将監の蔵人(うこんのじょうのくろうど、連隊長の貴人が居たが)、*得べき

冠もほど過ぎつるを(五位への昇進も既に見送られていて)、つひに御簡削られ(みふだけづられ、殿上当直の名札を削除され)、官も取られて(つかさもとられて、隊長職も剥奪されて)、はしたなければ(出世が望めない)、御供に参るうちなり(御供を勤める事になりました)。*「将監(しょうげん)」は近衛府の三等官で、作戦指揮官たる大将、次将に次ぐ実戦指揮の長で判官(尉、じょう)と呼ばれた、らしい(Web サイト「官制大観」)。*「冠(かうぶり)」についてはく《「得」「賜ふ」が付いた形で》従五位下に叙せられること。叙爵。(大辞泉)とある。「得べき冠」とあるので、「従五位下への昇進」ということだろう。

賀茂の下の御社を(かものしものみやしろを、下鴨神社を)、かれと見渡すほど(彼方に見渡す辺りで)、ふと思ひ出でられて(その御供に付いた者がふと隨身を勤めた時の事を思い出して)、下りて(馬を下りて)、御馬の口を取る(源氏の御馬の口を取りました)。

「ひき連れて葵かざししそのかみを、思へばつらし賀茂の瑞垣」(和歌 12-11)

「葵の使者を勤めた日、遠い昔の晴舞台」(意識 12-11)

*注にく右近将監の贈歌。「そのかみ(その昔)」に「神」を掛ける。>とある。「瑞垣(みづがき)」についてはく「みづ」は美称。古くは「みづかき」。神社・宮殿の垣根。たまがき。(大辞林)>とある。また訳文は「お供をして葵を頭に挿した御禊の日のことを思うと、御利益がなかったのかとつらく思われます、賀茂の神様」とある。なるほど、賀茂の瑞垣を見たからは下馬して御馬の口取りをしなければ詠めない歌のようだ。

と言ふを(と其の従者が言うのを御聞きに為った源氏は)、「げに、いかに思ふらむ(確かに是の者もどれほど辛く思っていることか)。人よりけに(人より目立った)はなやかなりしものを(晴姿であったらうに)」と思すも(と御思いになると)、心苦し(心苦しくなりました)。

君も、御馬より下りたまひて、御社のかた拝みたまふ(御社に向かって拝礼なさいます)。神にまかり申したまふ(そして神に御暇乞いなさいます)。

「憂き世をば今ぞ別る、とどまらむ名をば糺の神にまかせて」(和歌 12-12)

「今を去る身で信じたい、神のみぞ知る真実を」(意識 12-12)

*注にく源氏の独詠歌。「ただす」に正邪を糺す意と地名の糺の森の意を掛ける。>とある。下鴨神社境内の参道の森を右手に見て、御陵の在る北山に向かったのだろうか。とは北山を嵐山近辺とした場合だが、北山が叡山や鞍馬山の方面とした方が糺の森を通り道とするには自然にも思える。それでも御陵の在る北山といえ、やはり嵯峨野を想定するべきかと思う。賀茂社は宮筋に由緒が在るので、わざわざ御参りしても不思議は無い。ともあれこの歌は神頼みの願掛けだから、他力本願で責任感や当事者意識が希薄に見えても、それこそが神通力で気が軽くなるというご利益なのは、誰でも思い当たる所だろう。「憂き世をば(ままたらない当世といったものを)今ぞ別る(今や私は離れますが)とどまらむ(後に残る)名をば(成果といったものの)糺の神にまかせて(評価は神に任せます)」ということだから、自信たっぷりとも皮肉っぽいとも思えるが、先ずは願望なのだろう。

とのたまふさま(と仰る源氏の御姿を)、ものめでする若き人にて(供侍する口取りした者は感受性の鋭い若人だったので)、身にしみてあはれにめでたしと見たてまつる(心底から何と素晴らしい美しさかと押し奉りました)。

御山に(みやまに、故院の御墓に)詣うでたまひて(お参りなされると)、おはしましし御ありさま(生前の父帝の面影が)、ただ目の前のやうに思し出でらる(まるで目の前に御座するように思い出されました)。限りなきにても(最上位に崇め奉られても)、世に亡くなりぬる人ぞ(亡くなってしまった人であってみれば)、言はむかたなく口惜しきわざなりける(言い様もなく残念な次第で御座います)。よろづのことを泣く泣く申したまひても(右大臣家から謀反の咎で責められて止む無く都落ちする顛末を墓前に訴え申し為されても)、そのことわりをあらはに承りたまはねば(其の解決法を具体的に御答え戴けないので)、「さばかり思しのたまはせし(源氏を帝の補佐役として重用し、しかるべき折に春宮を即位させるなどの)さまさまの御遺言は、いづちか消え失せにけむ(何処へか消え失せてしまった)」と、いふかひなし(情けなくお思いでした)。

御墓は、道の草茂くなりて、分け入りたまふほど、いとど露けきに、*月も隠れて、森の木立、木深く心すごし(こぶかくこころすごし、鬱蒼として気味が悪い)。 *月齢 24 日頃の月の入りは 14:00 くらいで昼過ぎだが、3 月から 4 月の日没は 18:30 くらいで宵の入り。ただし此処の記述は正しくは<月も雲隠れて>であって、以下に続く歌の枕に成っているという説も在るらしく、段緒の「暮には、院の御墓拝みたてまつりたまふとて、北山へ詣でたまふ」以上の時刻特定に然程意味は無いかもしれない。

帰り出でむ方もなき心地して(帰り立つ気に為れないまま)、拝みたまふに(墓前に手を合わせていらっしやると)、ありし御面影、さやかに見えたまへる(故院がはっきりと御姿を現されて)、そぞろ寒きほどなり(源氏は寒気を覚え交霊体験を為さいました)。

「亡き影やいかが見るらむ、よそへつつ眺むる月も雲隠れぬる」(和歌 12-13)

「墓前に見えた面影に、良く似た月の涙顔」(意識 12-13)

*注に<源氏の独詠歌。「亡き影」は故桐壺院をいう。「月」は故院を象徴。「月も雲隠れぬる」とは、譬喩表現で、故院が涙で目を曇らせという意。『完訳』は「霊との感応をふまえた歌」と注す。>とある。そこでこの注を踏まえると当歌は「亡き影や(故院が)いかが見るらむ(如何御思いに成るのかと)よそへつつ(擬えつつ)眺むる月も(眺めた月も)雲隠れぬる(涙顔でした)」と読める。

[第八段 東宮に離京の挨拶]

明け果つるほどに帰りたまひて(源氏は夜が明け切ってしまう頃に二条院に御帰りに成って)、春宮にも御消息聞こえたまふ(春宮へも御手紙を差し上げなさいます)。*王命婦を(東宮御所には中宮が王命婦を)御代はりにてさぶらはせたまへば(身代わりとして控えさせていらしたので)、「その局に(その命婦の部屋に)」とて(宛てて)、 *注に<王命婦を藤壺の代わりとしての意。『完訳』は「出家して東宮への伺候は不審」ともいう。>とある。確かに賢木巻で「命婦の君も御供になりなければ」とあって中宮の御供で王命婦も出家していたが、母宮の代理として東宮御所の御用をしていたとしても、基本的な立場は

従者なので<本人の意思からして在り得ない>とは言い切れないし、一読者としては然う書かれている以上、本文を読む以外の読み方も無い。

「今日なむ、都離れはべる(本日を以って、都を離れます)。また参りはべらずなりぬるなむ(之で御目に掛からず終いに成ることが)、あまたの憂へにまさりて思うたまへられはべる(何より心残り御座います)。よろづ推し量りて啓したまへ(在らぬ疑いが及ばぬようにとの事情を万事お察しになって春宮へお取次ぎ下さりませ)。

いつかまた春の都の花を見む、時失へる山賤にして」(和歌 12-14)

何れ花咲く其の日まで、田舎暮らしで閑潰し」(意識 12-14)

桜の散りすきたる枝につけたまへり(という手紙を大方の花が散って疎らに咲いた桜の枝につけて御遣しになりました)。「かくなむ(こうした次第で御座います)」と御覧ぜさすれば(と命婦が春宮に源氏の手紙を御覧にさせ申せば)、幼き御心地にもまめだちておはします(八歳に御成りの春宮は幼心にも真面目に受け止めて御出ででした)。

「御返りいかがものしはべらむ(御返事はいかが致しましょうか)」と啓すれば(と命婦が御伺いを立てると)、

「しばし見ぬだに恋しきものを(少し会わなくても恋しいのに)、遠くはましていかに(遠く離れてしまつては増して如何に寂しくなることだろう)、と言へかし(と言って置きなさい)」とのたまはず(と春宮は仰います)。

「ものはかなの御返りや(随分簡単な御返事だこと)」と(と王命婦は)、あはれに見たてまつる(深い事情を御存じない春宮自身が、ただ単に主たる後見人が失脚するようにお考えなのを実に複雑な思いで拝し奉りました)。

あぢきなきことに御心をくだきたまひし昔のこと(源氏が中宮への遣る瀬無い恋心に身を躰しなされた昔の事)、折々の御ありさま(その時々御姿を)、思ひ続けらるるにも(命婦は次々と思ひ出されて)、もの思ひなくて(そんな仕柵など無しに)我も人も(源氏も中宮も)過ぐいたまひつべかりける世を(お暮らしだったら晴れやかな時代だったものを)、心と思し嘆きけるを(倫ならぬ恋に御悩み為された事が)悔しう(残念でならず)、わが心ひとつにかからむことのやうにぞ(自分の気持ち一つで防げた事のように)おぼゆる(自責の念に駆られました)。

御返りは(王命婦からの源氏への御返事としては)、「さらに聞こえさせやりはべらず(何とも申し上げる言葉も御座いません)。御前には啓しはべりぬ(春宮には謹んで御話し申し上げました)。心細げに思し召したる御けしきもいみじくなむ(心細げに思し召す御様子も居堪れませんでした)」と、そこはかたなく(あまり要領を得ず)、心の乱れけるなるべし(想念に心を取り乱していたようでした)。

「咲きてとく散るは憂けれど、ゆく春は花の都を立ち帰り見よ (和歌 12-15)

「ぱっと咲き散る桜なら、きっとすぐまた春が来る (意識 12-15)

*訳文は<咲いたかと思うとすぐに散ってしまう桜の花は悲しいけれども、再び都に戻って春の都を御覧ください>とある。葉桜の枝に結び付けた源氏の手紙に対する返歌なので、源氏を桜に準えた、ということらしい。というか、この歌の為に源氏が手紙を「桜の散りすきたる枝につけたまへり」たる設定なのだろう。「ゆく春」の「行く」は<過ぎて行く(この春)>ではなく、<行く先の(来るべき春)>ということのようだ。此の処、(12-12、13、15)と意味の句点が「5・7の起承、5・7・7の転結」になる句が続く。実際に和歌の詠唱は、句点で息継ぎ出来る限りに、一音ごとにかなり長く伸ばして、ゆっくりと歌われたそうで、聞き手はどちらの乗りも楽しんだらしい。

時しあらば(その時になったら)」と聞こえて(と御答え申し上げて)、名残もあはれなる物語をしつつ(大将の離京に名残りを惜しみながら)、一宮のうち(ひとみやのうち、御所の中は)、忍びて泣きあへり(女房たちが皆すすり泣き合っていました)。

一目も見たてまつれる人は(一目でも其の御姿を拝し奉った人は)、かく思し(この様に離京を決心なさり)くづほれぬる御ありさまを(弱々しくなられた源氏のご様子を)、嘆き惜しみきこえぬ人なし(嘆いて残念に申さぬ人も在りません)。まして、常に参り馴れたりしは(常日頃から御用を仰せ付かっていた)、知り及びたまふまじき(源氏の方は見知る筈も無い)長女(をさめ、下女や)、御厠人(みかはやうど、便所掃除人)まで、ありがたき(手厚い)御顧みの下(おんかへりみのした、処遇を受けて)なりつるを(いたので)、「しばしにても(例え暫しでも)、見たてまつらぬほどや経む(御姿を拝せずにご過すのか)」と、思ひ嘆きけり(嘆きました)。

おほかたの世の人も(大方の宮処人も)、誰かはよろしく思ひきこえむ(誰がこの事態を歓迎致すものでしょうか)。*七つになりたまひしこのかた(源氏七歳にお成りになってからはずっと)、帝の御前に夜昼さぶらひたまひて(父帝の御部屋に夜も昼も付いていらして)、奏したまふことのならぬはなかりしかば(源氏が申し上げる事で帝がお聞き入れに為らない事は無かったので)、この御いたはりにかからぬ人なく(源氏の口添えに助けられなかった人は無く)、御徳をよろこばぬや(其の御蔭と感謝しない者など居たでしょうか)。*注に<源氏七歳の時、読書始めの儀があった。>とある。源氏が母の桐壺更衣を亡くしたのは三歳の時。源氏が父帝によって御所住まいを許されたのは其の翌年で四歳。さらに桐壺更衣の母なる御祖母北の方を亡くしたのは六歳の時だった。七歳の読書始めの儀(ふみはじめのぎ、学者から正式に漢書の手解きを受ける)までは後宮に住んでいても、公式の御所表に出る事がなかったのだろう。

やむごとなき上達部、弁官などのなかにも多かり。それより下は数知らぬを、思ひ知らぬにはあらねど(其の御恩を忘れた訳ではなかったが)、さしあたりて(当面は)、いちはやき世を思ひ憚りて(謀反嫌疑のとぼちりを怖れて)、参り寄るもなし(挨拶に来る者も在りません)。世ゆすりて惜しみきこえ(世の中全体が動揺して源氏の失脚を惜しみ)、下に朝廷をそしり、恨みたてまつれど(陰では政府を非難し嫌悪を覚え致したが)、「身を捨ててとぶらひ参らむにも(出世を投げ打ってまで源氏の慰労に参った所で)、何のかひかは(事態は好転しない)」と思ふにや(とでも思ってたか)、かかる折は人悪ろく(此の際は世間体を重んじて)、恨めしき人多く(不義理をする者が多く)、「世の中はあぢきなきものかな(世の中は味気無いものだな)」とのみ、よろづにつけて思す(源氏は何に付けても御思いに為ります)。

[第九段 離京の当日]

その日は、女君に御物語のどかに聞こえ暮らしたまひて(若妻との語らいでゆっくりお過ごしに為って)、例の(旅立ちなので)、夜深く出でたまふ(まだ暗い内から出発なさいます)。狩の御衣など(狩装束の)、旅の御よそひ(旅姿を)、いたくやつしたまひて(ごく地味になさって)、

「*月出でにけりな(月が出て来ましたね、そろそろ出発ですね)。なほすこし出でて(もう少し外へ出てきて)、見だに送りたまへかし(見送って下さいな)。いかに聞こゆべきこと多くつものにけり(旅先では、どれほど御話ししたい事が多く積もったか)とおぼえむとすらむ(と思う事に為るのでしょうね)。一日、二日たまさかに隔たる折だに(ほんの数日離れていただけでも)、あやしういぶせき心地するものを(話したくて堪らなくなるものを)」 *離京当日が25,6日だとすると、月の出はざっと3:00くらいで真夜中である。また此処の記述は装飾美文とは思えない源氏の台詞部分である。月末の月は見えても薄くて暗いが、そろそろ出発に掛かる時分かもしれない。この時刻は午前だが夜明け前なので、まだ日は改まっていない。だから一日を24時間で見れば、昨日の午前中に「今日なむ、都離れはべる」と源氏は春宮に取り次ぐ王命婦に手紙を書いている。之が陰暦の生活感なのだろうか。時系列で整理すれば、その前日の朝に故院の墓参りに向かっている。その数時間前の夜明け前に中宮に会っている。その前日は留守中の二条院の財産管理を紫の上に預ける手筈を整え、若君の乳母や花散里に手当てを送り、その合い間に尚侍と手紙を交わした。その前日は朝帰りて昼まで寝ていたが午後は師宮と三位中将が来客して夕方まで談笑した。そして夜は花散里を訪ねてまた朝帰り。その前日とは出発当日から数えて見落としが無いとしても5日前だが、本文では「二、三日かねて」と在った日で、夜に大殿を訪ねて朝帰りした、という事に成る。

とて、御簾巻き上げて、端にいざなひきこえたまへば(縁側近くに源氏がお誘いになると)、女君、泣き沈みたまへるを(夫人は泣き沈んで居らしたが)、ためらひて、ゐざり出でたまへる(ためらいながら膝を進めて出て御出でになります)、月影に(月の光りが差す所に)、いみじうをかしげにてあたまへり(とても美しくお座りなさいます)。「わが身かくて(私が旅行中に)はかなき世を別れなば(死ぬようなことがあれば)、いかなるさまにさすらへたまはむ(この若妻はどんな目に遭う事だろう)」と、うしろめたく悲しけれど(源氏は夫人の劳しい姿を見て残して行く事が忍びなく悲しかったが)、思し入りたるに(自分まで悲観しては不安げな夫人を)、いとどしかるべければ(ますます追い込んでしまいそうだったので)、

「生ける世の別れを知らで契りつつ、命を人に限りけるかな (和歌 12-16)

「こんな別れになろうとは、思わぬ恋の命懸け (意識 12-16)

はかなし(分からないものです)」など、あさはかに聞こえなしたまへば(わざと間の抜けたような事を言い繕いなさいましたが、夫人はこうお返しになりました)、

「惜しからぬ命に代へて目の前の、別れをしばしとどめてしがな」(和歌 12-17)

「命に代えても惜しくない、引き止められるものならば」(意識 12-17)

「げに、さぞ思さるらむ(なるほど、其処まで御思いでしたか)」と、いと見捨てがたけれど(非常に離れ難かったが)、明け果てなば(夜が明けて明るくなって人目については)、はしたなかるべきにより(面倒な事になりかねないので)、急ぎ出でたまひぬ(急いで出発なさいました)。

道すがら、面影につと添ひて(紫の上の面影がずっと離れず)、胸もふたがりながら(心残り一杯で)、*御舟に(みふねに)乗りたまひぬ(お乗りになりました)。 *注に<『集成』は「当時は普通、山崎で乗船し、淀川を下る」と注し、『完訳』は「馬か徒歩で伏見まで至り、そこから川船で難波(大阪)に至る」「翌日、難波から須磨に航行」と注す。>とある。この注は必脚である。この注が無いと、続く記述に「かの浦に着きたまひぬ」と言った後で「大江殿と言ひける所は」と言う言い方の、意味が掴めない。というか普通、「御舟に乗りたまひぬ」に続く文が「かの浦に着きたまひぬ」では、その間に一泊したとは到底思えない。それに当時の航行法では、京から須磨に一泊二日では余りにも早い強行で、特に記述が無ければ読者は寧ろ二泊三日掛かりを想定する、という指摘もある。何れにせよ是では本文が余りにも舌足らずで、「胸もふたがりながら」と「御舟に乗りたまひぬ」の間に欠落があるように思えてならない。

*日長きころなれば(日の長い時分なので)、追風さへ添ひて(翌日は、追い風まで加わって)、まだ*申の時ばかりに(日暮れ前の申の時ほどに)、かの浦に着きたまひぬ(須磨の海岸に到着なさいました)。 *3、4月の日没は6:30 くらい。 *注に<午後四時頃に須磨に到着。>とある。

かりそめの道にても(今までどんな折であつても)、かかる旅をならひたまはぬ心地に(これほどの遠出を為さった事が無い源氏の御気分は)、心細さもকাশさもめづらかなり(心細さも物珍しさも初めての事でした)。*大江殿と言ひける所は(昨晚泊まった大江殿という所は)、いたう荒れて(由緒在る旅宿らしいが、ひどく荒れて)、松ばかりぞしるしなる(立派な松の木だけが名残りをとどめていました)。 *「大江殿(おほえどの)」については<現在、大江橋の地名が残っている大阪市東区天満橋の付近。>と注にある。ざっと言えば「梅田」あたりのことらしい。Wikipediaに「梅田」は「埋田」で江戸時代から埋め立てが盛んになった淀川河口の湿地とあり、この物語の時代だと船旅の中継地として「大江殿(河口の御殿)」という旅宿があつたのかも知れない。ただ其の時代でも既に、今で言う「北野天神＝綱敷天神社」の前身と為った、嵯峨天皇や源融(みなもとのとおる)を由緒とする神野太神宮および菅原道真を由緒とする梅塚天満宮は、其処等辺に在つたらしい。「綱敷天神社＝キタの氏神」は神山町の御本社他に茶屋町に御旅社が在る、というのも何処か因縁めいている。尚「大江殿」については、伊勢斎宮が解職帰京の際には必ず山崎から淀川を下り難波津で禊を行った後河陽宮を経て入京したらしく、その際の休憩所が「大江御厨」とあつて「大江殿」は其処の事を言っているという説がある。源氏の須磨行が禊の意味であつてみれば何かが符合するようにも見えるが、斎宮は次の歌に繋がらないので其の件に関してはまた改めて考えたい。

「唐国に名を残しける人よりも、行方知られぬ家居をやせむ」(和歌 12-18)

「死んで名を残す偉い人、生きて名も廃れ果てる人」(意識 12-18)

*「唐国(からくに)に名を残しける人」について注釈は<中国の屈原(くつげん、紀元前3世紀頃の楚の政治家)の故事を想起。屈原は讒言により追放され汨羅(べきら)の淵に身を投じた。>とある。なぜ大江殿に因んだ歌で、讒言により失脚した唐の政治家を持ち出したのか。謀反嫌疑の左遷といえ、菅原道真と源高明である。醍醐天皇の第十皇子で臣籍降下した高明が光君に準えられるのは当然だろうが、道真公と光君も遠く無い。道真は宇多天皇の下で

出世し、宇多天皇は醍醐天皇に譲位する時にも道真を重用するように求めたが、醍醐天皇の御代に藤原時平の讒言によって失脚した、という事らしく、源氏が今の己の姿を道真公に準えるに十分な類似性が在る設定にも見える。尚、「家居(いへみ)」は<家を造って住むこと(古語辞典)>であり、其の暮らし、との事。

渚に寄る波のかつ返るを見たまひて(そして今は須磨の渚に寄せた波が引き返すのを御覧に為って)、「*うらやましくも」と、うち誦じたまへるさま(口ずさみなさる源氏の御姿を)、さる世の(その歌自体は世に知られた)古言(ふること、古歌)なれど、珍しう聞きなされ(栄光ある源氏らしからぬように聞き為して)、悲しとのみ御供の人々思へり。 *「うらやましくも」という古歌については、<『源氏積』は「いとどしく過ぎ行く方の恋しきにうらやましくも返る波かな」(後撰集羈旅、位置三五二、在原業平・伊勢物語)>を指摘、と注にある。この歌は「遠ざかるほどに益々募る望郷の念には羨ましくさえも見える力強い引き潮の様子であることよ」くらいの意味だろうが、その意味合いよりはむしろ「いとどしく(益々)」が「過ぎ行く方」と「うらやましく」に掛かり、更に繰り返す「返る波」の音がザブンと聞こえてくるほど「いとどし(甚だし)」い有様だったという言い回しの妙が売りなのだろう。加えてこの歌が有名だったのは、伊勢物語の第七段の東下りの印象的な場面に取り上げられたこと、に依るようだ。

うち顧み給へるに(うちかへりみたまへるに、振り返って御覧に為ると)、来し方の山は霞はるかにて(やって来た宮処の方角の山は霞がかって遠く)、まことに「*三千里の外(さんぜんりのほか)」の心地するに(と唐の詩人が左遷の悲哀を描いた通りの心持がして)、權の雫も(かいのしづくも、權に滴る雫の様にいくら拭いても)堪へがたし(止まらぬ涙に袖が乾く事が有りません)。*「三千里の外」は<『源氏積』は「三千里外随行李十九年間任転蓬」(扶桑集、巻七、紀在昌)を指摘。『異本紫明抄』以後は「十一月中長至夜三千里外遠行人」(白氏文集巻十三、冬至宿楊梅館)を指摘する。>と注にある。漢字を見るだけで、僻地への長期の流浪の切なさや貧しさと侘しさと寒さの句と察せられる。

「故郷を峰の霞は隔つれど、眺むる空は同じ雲居か」(和歌 12-19)

「山の彼方の故郷を、涙で仰ぐ懐かしさ」(意識 12-19-1)

「峰の霞は深くても、目指す気持ちは隠れない」(意識 12-19-2)

*この歌はなるべく平易に読めば、「道すがら面影につと添ひて」いた紫の上を思う軟派の心情かと思う。「ふるさと」は<二条院>で、「峰の霞」は<在らぬ疑い>で、「くもゐ」は<涙顔の空模様>で、その空を「眺むる」人は<源氏と紫の上>という所か。しかし源氏にとって「ふるさと」は<宮処>であり、「くもゐ」は<雲の上人の御所>であってみれば、「峰の霞」は<敵対勢力そのもの>を指すとも考えられ、「眺むる空は同じ雲居」は<源氏勢も右大臣家勢も目指す目標はどちらも権力>とも読める。源氏には「春宮」の後見人としての実務上の責任も在るが、負け犬のまま終われないという自尊心が無い筈は無い。前段では、実際に其の思いの表記もあった。ただ、この時点でこの心意気を表明したなら意外なほどの鼻っ柱の強さで、なかなか複雑な印象がある一句。

つらからぬものなくなむ(この様に詠んだ源氏の心中は決して穏やかではなく、辛くない筈も有りませんでした)。